

妖精の住む森を利用した森林環境教育リーダーの育成について

岩手北部森林管理署 浄法寺森林官 田口暁史
新町森林官 木村雄大

1 はじめに

今年2011年は国連の定める国際森林年であり、近年森林環境教育や森林ふれあいに
関して需要が増大してきているなかで森林の
魅力をPRする力と技・知識を持った森林技
術者の需要が見込まれると思います。

しかし、森林インストラクター等の資格は
持っていても経験不足だったり、森林教室等
の企画・運営者の異動によつての各署の取組
みに差があるなどの問題があります。



2 課題を取り上げた背景

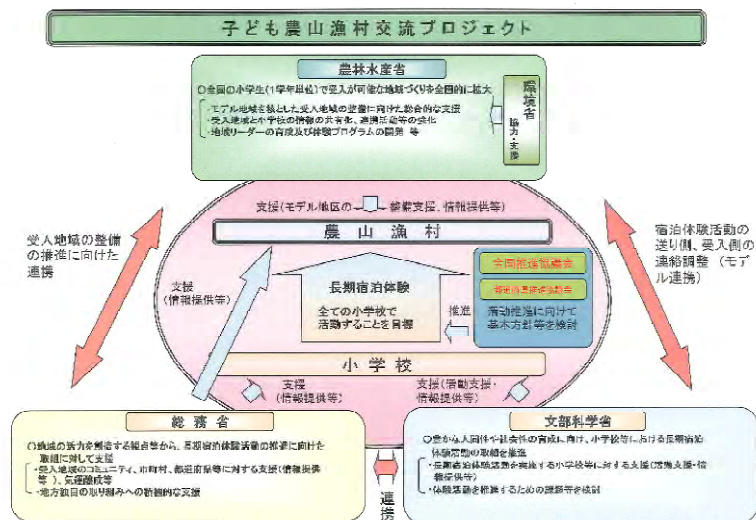
平成21年度より「子ども農山漁村交流プロジェクト」がスタートし、当署管内の葛
巻町の上外川国有林において「妖精の住む森」をテーマに地域の特性を活かしたモデル
地域のフィールド整備を行ってきました。

今年度はそのフィールドを活用した「学習・体験プログラムの作成」を目標に、①民間の体験
学習を学ぶ②当署における森林環境教育の取組等をベースにした森林環境教育リーダーの
養成に取り組むこととしました。

国と地方自治体・各実施団体が一体となり、リーダーとなる為の知識や技術を学べる
ような研修があれば、子ども農山漁村交流プロジェクトの受入モデル地域でのプログラ
ム設定の幅や、森林環境教育の推進を図れるのではないかと思います課題を取り上げました。

また、今後需要が見込ま
れるなかで中心となってイ
ンタープリターを行ってい
くリーダーを育成するた
めにはどうしたら良いのか、
どんな問題点や課題がある
のか、理想のリーダー像に
ついて子ども農山漁村交流
プロジェクトの2年計画の
まとめとして取り組みました。

まず、子ども農山漁村交
流プロジェクトについて、
概略を説明しますと、「集



「団宿泊体験や自然体験活動」を通じた児童の内面的な道徳心の育成を目的に、総務省・文部科学省・農林水産省が連携して小学生を対象に農山漁村での長期宿泊体験を推進するものです。その中でわが署の役割として昨年から2年にわたりフィールドの整備や学習体験プログラムの作成をするなど森林環境教育の推進に取り組んでおります。

3 研究の方法及び経過

(1) H21年度までの取り組みとしまして大きく分けて3つあります。

① モデル地域（フィールド）の設定
葛巻の特産品でもあり景観にマッチするという事で、カラマツ林に約2.3^{キロ}の遊歩道と人工林を活用した林業と環境保全の学習ができるフィールドを作成しました。

② 農業・漁業・環境との産業の連携
地域の特性を生かした産業と連携する事によって地元の意見を生かしてきました。

③ 利用促進につながるプログラムの作成の準備
親しみやすいネーミングをつけ、フィールド毎に学習のポイントである「気づき」をまとめプログラムの考案をしました。
また、地域の実施団体との連携も永続的になるよう活動してきました。

(2) H22年度の取り組みとしまして、

① 学習体験プログラムの作成

② 民間体験学習から学ぶ

③ インタープリター養成研修

この3つの取り組みの円が重なった中心がどんな色になるのか、理想のリーダー像についてどんな事がわかってくるのかという事に意識をおいて取り組みました。

H21年度の取り組み

	モデル地域(フィールド)の設定 <ul style="list-style-type: none"> 葛巻の景観にマッチしたカラマツ林に設定 人工林を活用し、林業と環境保全の学習の場
	農業・漁業・環境との産業の連携 <ul style="list-style-type: none"> 森林と自然エネルギーの関連 森は海の恋人と言われるよう農業・漁業との関連
	利用促進につながるプログラム作成の準備 <ul style="list-style-type: none"> 「気づき」のポイントごとプログラム考案 地域の実施団体との連携

H22年度の取り組み



学習体験プログラムの作成

民間の体験学習から学ぶ

リーダー育成研修の実施

(3) 3つを段階的に進めていくテーマとしまして、

- ① 地域の特徴と伝統を生かした体験学習プログラムの開発
- ② 交流プロジェクト推進のためのインタープリター育成
- ③ 国・町・実施団体との連携のあり方

と3つのテーマで取組んできました。

独自の行動ではまとまったものがないので、昨年と同様に検討委員会を開催し、アイデアや意見をいただきました。そこで出された意見としまして、

- ・個々の実施団体の特徴をどう生かしていくか。
 - ・葛巻の特徴に合ったプログラムにしてほしい。
 - ・自分達の生活に密着させる内容でないと学習にならない。
- と意見をいただきました。

(4) 意見をふまえながら、先ほどのテーマへのステップとしまして、

まず、各実施団体の特徴を入れたリーダー育成研修を実施し、実践から体験学習プログラムの開発を行う。

次に、地域の特徴を盛り込み、なおかつ誰でも使用しやすいプログラムの作成。

最後に実践プログラムDVDを作成し、使用する側のバックアップと情報提供を行い受入体制の充実を図っていくという手法でテーマへアプローチしていきました。

研究のテーマ

地域の特徴と伝統を生かした体験学習プログラムの開発

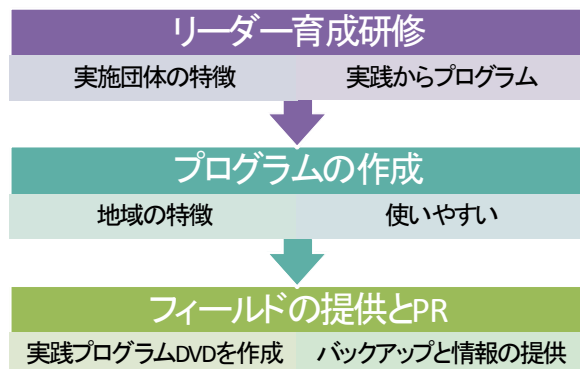
交流プロジェクト推進のためのインタープリター育成

国・町・実施団体との連携のあり方

検討委員会の開催



テーマへのステップ



まず、最初のステップとして、リーダー育成研修を実施しました。これは研修の様子です。各実施団体が行っているプログラムを実際に体験しました。詩の朗読をしながら、その詩を体で表現してみるというプログラムや、地球温暖化の仕組みを一人一人が地球や太陽、光になって体を動かしながら学ぶプログラムなど、子どもに戻った気持ちで体験してみることを内容として実施しました。

二つめのステップとして、プログラムの作成について前期・後期に分けて実施された研修では、前期に葛巻町の林業・農業・環境との関連や森林環境教育の基礎を学び、後期には研修生が体験したプログラムを基に、オリジナルの実践プログラムを開発することにしました。

リーダー育成研修



プログラムの作成

(前期・後期の2回に分けて実施)

<p>前期 葛巻の特性と産業に学ぶ講義・実習</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・林業・農業・環境との関連 ・森林環境教育の基礎
<p>後期 実施団体の実践から学び考える</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・地域を生かしたオリジナル ・実践プログラムの開発

「森の句会」



「森の美術館」



研修のなかでは、他にも森の中で感じたことを俳句にする「森の句会」というプログラムや、森の中にあるものを自由に使って芸術作品を作る「森の美術館」というプログラムを体験しました。こういった体験をした研修の最後に、研修生にはオリジナルの実践プログラムを開発していただきました。

研修生が考案したものには、子ども達がカラマツになったつもりで風や光を感じながら四季を表現して体操をする「カラマツ体操」というプログラムの他、生態系のつながりや間伐設計について学ぶもの、鳥になりきって狩りをして森林の環境について学ぶものなどがあり、様々な内容のプログラムを開発することができました。

4 研究の結果

研修を行った国・町・実施団体との連携のあり方について考えてみると、連携のメリットとして、それぞれが持っている技術や知識の交流が出来たことや、情報を広く発信できたことがあげられ、問題点としては、事務局をする側の負担が増えることや内容がマンネリ化するということがあげられます。

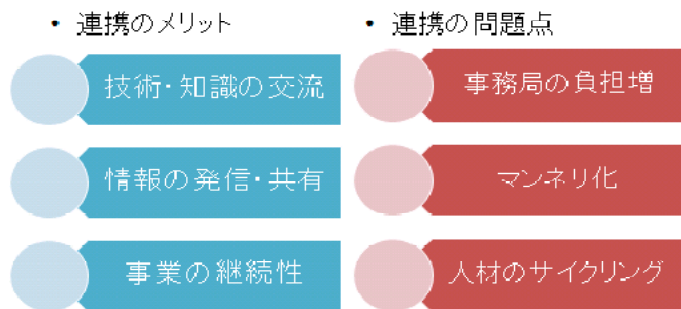
次に、森林環境教育リーダーの育成についてまとめてみます。

森林環境教育で望まれるリーダー像とは何かといいますと、林野庁では、森林林業に関する技術や知識を持っていて、連携のパイプ役としての役割があります。実施団体では、環境や農業分野における技術や知識があり、また子どもたちが感動したり楽しみながら学習できるテクニックがあります。地方自治体では、地域の特性や歴史、生活に密着した産業に精通しており、これらのそれぞれの分野との繋がりをもって企画・立案していくことがリーダーには求められているのではないかと考えます。

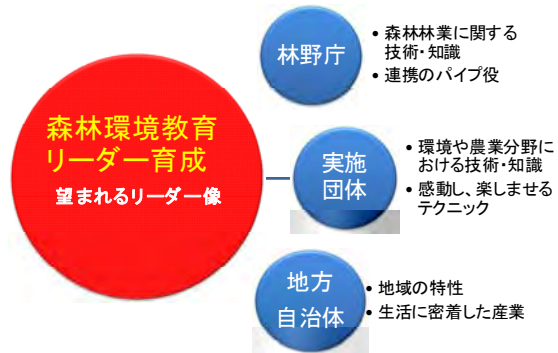
今回の取組みの結果としては、

- (1) 個々の実施団体の環境教育プログラムの特徴を生かすプログラムの作成が行えた。
- (2) 「林業・農業・環境」と一環した森林環境学習が行えるモデル地域の設定が行えた。
- (3) 国・町・実施団体の連携を構築し、今後の活動母体の育成に繋がった。

国・町・実施団体との連携のあり方






研究のまとめ (森林環境教育リーダーの育成)



結果

森林環境教育リーダーの育成

- | | |
|---|--|
|  | 個々の実施団体の環境教育プログラムの特徴を生かすプログラムの作成が行えた。 |
|  | 「林業・農業・環境」と一環した森林環境学習が行えるモデル地域の設定が行えた。 |
|  | 国・町・実施団体の連携を構築し、今後の活動母体の育成につながった。 |

5 考察



- ・国際森林年にあたって、我が国のテーマは「森を歩く」
- ・森林・林業再生プランのキーワード「フォレスター」

これは上外川学習教育林のイメージです。

このように子ども農山漁村交流プロジェクトの取組みとして、昨年度はモデル地区の整備などのハード面を、今年度はリーダーを育成しながら体験プログラムを作成するなどソフト面を行ってきました。

子ども農山漁村交流プロジェクトに向けての取組みとして、リーダー育成研修を行ったことで、それぞれの分野との繋がりの中から技術や知識の交流が図られ、体験プログラムの幅を広げられたことは成果としてあげられます。また、各方面のまとめ役になるという理想のリーダー像も見えてきたと思います。

しかし現在、私たちの職場においても地元との関わりが少なくなっている状況にあり、意見集約に苦勞するなどの課題もあります。

今後は地域との繋がりを持ちながら、森林の魅力を子ども達に伝えることの出来る人材の育成が大事であり、そして、こういったリーダーの育成が今後の森林のためや地域のためとなり、また私たち国有林の組織にも非常に重要な存在になるものと考えます。

6 まとめ

2011年、国際森林年にあたっての我が国のテーマは「森を歩く」とされており、これから進められる森林林業再生プランのキーワードは「フォレスター」であると思います。これらを進めていくためにも、企画立案から指導が出来るリーダーの育成が今後ますます必要であると考えます。